

www.deutschesheer.de; http://marine.de; http://
www.deutscher-marinenbund.de; www.luftwaffe.
de及びVogt, a.a.O., S. 153ff., 205ff., 228f. を参照のこと。
これらの顕彰碑でも同様な式典が行われている。国防軍は六〇年の人道支援を目的とした派兵を皮切りとし、次々と紛争・戦闘地域へと派兵しており、〇五年六月の時点でアフガニスタンにおいて一四人の死没兵を出している。さらに同年八月、国防大臣が以後も国防軍の犠牲者が増えることを想定し、国外での軍事行動における死没兵士のための予算を一〇〇万ユーロに増額する計画を明らかにした。Hamburger Abendblatt, 15. August

2005. こうして現在、「戦争と暴力支配の犠牲者」の枠は広げられる傾向にある。

(36) 子安宣邦『国家と祭祀』青土社、二〇〇四年、一八七頁。

(37) いわゆるネオナチおよび極右政党による「追悼」行為も現在のドイツの戦没者追悼空間の一角を形成していることを忘れてはならない。それらも「上から」規格化された「追悼」への個別具体的な抵抗という性格を持っている。

(38) 高橋哲哉『靖国問題』筑摩書房、二〇〇五年、二二〇頁。

インタビュー

靖国神社前宮司・湯澤貞氏に聞く

——やすくにの静かに仰ぐ櫻かな

(同席者 阪本是丸)

弓山 『現代宗教』の今回の特集が「慰霊と追悼」となっております。戦後六〇年ということもあり、靖国神社の話が大きく取り上げられたということと、そういう社会的な問題を省いても、日本人の慰霊や靈魂観を考える上で、靖国神社に言及しないわけにはいかないというところで、お話をおうかがいしたいと思っっている次第です。今号には、高橋哲哉氏のインタビューも掲載される予定ですが、是非、湯澤先生には、靖国神社の根幹である慰霊という側面——宗教的側面と申し上げてよいのかもしませんが——について、お話しいただきたいと考えております。

昨年、私も参拝させていただいたんですけれども、二

〇万人という戦後最高の参拝者が集まった八月一五日の意味についてうかがいたいということ、いわゆる「合祀」「分祀」の問題についても、たぶん読者は、具体的にどういう形で合祀が行われているかということも知らないと思うんですね。そのあたりのことも聞かせていただきたいと思っております。それから、靖国神社の問題で、悩ましい問題は、公的な側面と、信仰という私的な側面が両方あるところで、そのあたりが、いろいろとねじれの現象を生んでいるのかな……ということを中心にかがいたいと思います。

まず、先生が明治神宮から靖国神社に移られた時に、宮司様としてご奉仕された時のお気持ちといいますか、



湯澤 貞氏

または明治神宮での祭祀の仕方と靖国神社での祭祀の仕方が違うんだということから、お話をうかがってもよろしいでしょうか。

■靖国神社宮司として

湯澤 はい、私は、平成二年まで明治神宮に三三年五月奉仕しておりましたが、当時、靖国神社の崇敬者総代で、國學院大學の教授をしていらつした森田康之助先生を通じて、靖国神社はどうかというお話がございました。明治神宮におりますと、神職としては温室の中に

はなく、儀式の過程でこれはいいなという感じが、ずいぶん残っておりました。

弓山 実際に靖国神社でのご奉仕にあられたの感慨、お気持ちなどを、今からふり返ってお聞かせいただけますか。

湯澤 そうですね。一番じんときますのは、ご本殿に大きな鏡があるんですけどね、そこに英霊のご遺族の方がおいでになりますと、坐っているあいだに必ず涙をこぼされるんですね。それを見ると、やはり戦争というのは、起こしてはいけないなという感じがしみじみいたしました。

■八月一五日への思い

弓山 私も、先日はじめて昇殿参拝させていただいたんですが、特に行事もない日曜日なのに、多くの方が参拝されていたのに驚きました。昨年の八月一五日には、二〇万人という方々が集われたそうですね。このことの歴史的意味を先生はどのようにお考えになりますか。

湯澤 反面教師といいましょうか、靖国参拝については反発がございますね。それがマスコミを通じて垂れ流し

いるような感じですから、他に行かなくてもというような感じもしました。ところが、靖国神社と言いますと、私の同級生も何人か戦争に志願して行きまして、祀られているということもありましたし、私も、旧制の中学時代には少年航空兵とか、予科練とかですね（志願して行っても、実際は役には立たなかったんですけどね。負けでしたから、仲間は途中で帰ってきたんですけど）、そういうこともありまして、戦争が続いていればやがて我々という感じが、私一人ではなく、同級生といろいろ話をしていますと、みんなそんな気持ちでいたんですね。それで、靖国神社という話になったもんですから、よろこんで、といいますか、神職冥利につきるな、という感じで、ご奉仕をさせていただきました。

弓山 具体的に、明治神宮と靖国神社では、日々の奉仕の仕方というのはかなり違うものなのでしょうか。

湯澤 そうですね。靖国神社は、はじめから神社本庁の傘下には入らず単立で参りました。

明治神宮は、今は神社本庁から脱退しておりますけれども、本庁参加の神社は祭式が統一されております。靖国神社の場合は、旧祭式と言いますか、祭式だけで

されるものですから、若い、今まで靖国神社を意識されなかった方々の中にも、どんなところだろう、いっぺん行ってみようとおいでになる方もあります。そういうことを思い出して、もう一度お参りしようとおいでになる方もあります。お一人お一人気持ちは違うと思いますが、要するに、戦争で亡くなった方にもう一度お会いしようという気持ちでおいでになった方が多いと思います。

弓山 昨年は、例年より多くの人が参拝されたという報道もされていましたが、阪本先生はどのようにお考えですか。

阪本 そうですね、私も単に神道研究者という立場だけではなく、社家の家に生まれた者という立場、『神社新報』の編集主幹としての立場など、様々な形で靖国神社とは深く関わってきました。また、私や家内の母親も、戦死者をしのんで靖国に行っていましたし、おじが昭和の初めに靖国神社の主典をしていて、國學院の歴史を出て、靖国神社の歴史をはじめて書いたということがあるので、私は家族を通して靖国と深いつながりを持っているとも感じています。

靖国神社については色々とかく言う人がいるんですが、一度、お参りして、たった一人でもいいからこうべを垂れて祈っている人を見ていただきたい。その姿を見た時に、この神社が軍国主義の神社であるとか、戦前の侵略主義の象徴であるとか、ましてや、大江志乃夫さん『靖国神社』岩波新書、一九八四年)のように、血塗られた神殿であるとか、思うでしょうか。そういうふうに決めつける前に、さまざまな祈りがあるということをお分かっていただきたい。去年参拝された方々は二〇万人もおられるのですから、二〇万の思いがあるはずなのです。そんなそれぞれの思いを大事にしてほしいのです。いま一番人間に必要なのは、相手の気持ちを慮る、忖度するということ。一種、我慢することは我慢する、というのがなくて、私が嫌なものは嫌なんだからやめてくれ、俺がいいんだからいいじゃないか、というのは、あまりにもね。

その場にいないと分らないのに、言葉の上であるとか、一種の観念論みたいなことではないとか悪いとかいう論議をしている。しかし、そこに靖国神社の祭祀があるって、宮司さんが奉仕されている。靖国は明治二年に招

いうことを、私は評価しておるんです。まあ、宮司さんがおっしゃったように色んな思いがあるということなんだと思うんですが。

■合祀の実際

弓山 自分の家族を亡くして手を合わすということだと、自分のお墓でも、仏壇でもいいと思うんですね。それを、あえて靖国神社にお参りに行かれるというのは、それなりに、魂に対して考えた上で行かれているのだと思います。たぶん、合祀というのがどういう形で行われて、それが日本人の靈魂観とどういう関わりがあるのかというのが見えづらいために、阪本先生がおっしゃったように、単なる観念論でいい悪いという話をしてしまうのかと思うんです。それでは具体的に、合祀というのはどういう形で行われているものなんでしょうか。

湯澤 今、阪本先生がおっしゃったように、靖国神社は明治二年にご創建になりました。その時には、明治維新の時の官軍、錦の御旗の下に戦った方々が合祀をされるということが最初にあるわけですね。その流れをくんでおりまして、国のためにつくした、命を捧げた方を祀つ

魂社としてできましたが、それ以前に、文久年間に幕末の志士たちが自分たちの同志を、幕府の追及を逃れて、いつの日かきつといい社会が来るだろうと念じたのがはじまりなんですね。そのところ、一番根っここのところがなくて、この間の大戦だけが靖国神社だというのはおかしいのです。仏教が全盛で国教みたいな時代に、色んな人が、自分なりの、祀りたい、あるいは祀られたい方式で、慰霊をやったということ、そして慰霊だけではなく顕彰をやったということの意味は重い。この慰霊と顕彰の二つがないといけないと思います。人間というのはみな、おそらく、仏壇とか神棚、あるいは御霊に手を合わせていても、慰霊するだけでなく、ご先祖様の力をいただくという、ある意味での顕彰を行いますね。この慰霊と顕彰の両方があります。数の問題ではないのですが、八月一五日に、あるいはふだんの日でも散策されてお参りするという方が多くなってきたということは、やはり、日本人が生きているということ、魂、死者というものが、特に公のものに関わった死というものを考えなければならぬんだということを思い出してきたんじゃないかと

て、今日に到っているわけですね。戦前は、どういう方を合祀するかというのを、陸・海軍省が所管しておりました。普通の神社は内務省でしたが、靖国神社だけは陸・海軍省が所管で、そこが大臣官房の副官のところ、まとめて祭神名票というものを靖国神社に送ります。神社の方では、その祭神名票に基づいて、誤字を訂正し、住所とか色んなものを調査した上で、その年の合祀を決めて、その御神霊をお招きして、お祀りするわけですね。

弓山 戦後は、厚生省から、名簿が来るという形ですね。

湯澤 ええ、そうですね。遺家族援護の一部というような関係で援護局が扱ったようですね。

弓山 年に一回、秋季例祭の時に、具体的に、儀式の模様を、もし差し支えがなければ。

湯澤 ええ、昔は春秋の大祭の時にやったんですけど、今は秋の大祭の前日ですね。この間も、小泉さんのお参りになったあの晩に、合祀をしました。今は、招魂祭というのがないんですね。もうすでに、何年までに戦没された方は、ということ、招魂しておりますんで、それはご本殿の向かって右のほうに、相殿の間と称しているところにお祀りしています。そこにいらっしゃる方々は